

困ったら「助けて」が 言える社会へ

東浅川小学校での「車いす体験学習」。順番に体験する4年生に押し方をアトバース



「バリアをなくせば、心はフリー！」

人おキマスト

題字・永六輔

ある日、突然の事故で重度障がい者となり、幼い3人の娘を抱えたままシングルマザーに――。「死んだほうがマシ」と嘆いた絶望の淵から1枚のナプキン作りを機に立ち上がり、子育てをやり遂げた。悔しい経験にもめげず誰にでも遠慮なく物申す強くてやさしい榎田さん。プロの看護師、介護支援専門員として活躍し続ける彼女が体现してみせた、幸せに生きる術とは？

「あー、うまく曲がれない」今年5月に八王子市立東浅川小学校で行われた「車いす体験学習」。参加した4年生69人が順番に車いすに乗り、後ろから押し始めると、あちこちで声上がる。最大の難所は約10センチの段差だ。スロープを設置した下り坂は後ろ向きに進む。「急に早くなったり遅くなったりして、落ちちやうんじやないかと思った。マジ、怖かった」スロープの坂を無事に下りし終わった押し役の女の子は、安堵のため息をついた。スロープのない段差を乗り越えるときは、前輪を持ち上げて押す。コツがつかぬす、

力まかせに引っぱり上げた男の子は悲鳴を上げた。「メッチャ、疲れた！ 力がすごく必要で難しい」ボランティアで講師を務めたのは看護師の榎田美知子さん(60)。36歳のとき階段で転んで脊髄損傷になり、下半身がマヒして動かない。体験に先立ち、車いす生活で3人の娘を育てた経験を昔の写真を見せながら説明すると、子どもたちは真剣な顔で聞き入っていた。車いすの不便さを体感してもらうため、コース設定にも工夫を凝らした。車いすに乗ったまま下駄箱の最上段や最下段に手を伸ばし、買い物するとき商品に手が届かなくて困る場面を想像してもらった。手洗い場では、車いすが前向きのままだと蛇口に手が届かない。横向きにしても届かないときは、友達に声をかけ、蛇口をひねってもらった。榎田さんは7年前から車いす体験学習の講師をしている。同小だけでなく近隣の小中学校で年4回行う。「毎回、子どもたちが『これからは勇気を出して手伝います』と言ってくれるので、やりがいがあります。実際に、私の話を聞いた男の子6、7人が街で私を見かけて走ってきて、段差にスロープを設置する手助けをしてくれたことがあるんです。とっつてもうれ

「車いす3人の娘を育てたシングルマザー！」

車いすの看護師

榎田美知子さん⁶⁰

しかつたです」
 車いす20台を用意して協力してくれたのは浅川地区社会福祉協議会だ。同会会長の上村秀如さん(69)は柳田さんの魅力をこう語る。
 「とにかく明るいんです。大変な苦勞をされたことは聞いていますが、その苦勞をあまり感じさせない。そして、どこへでも出ていって、何でも遠慮なく言う。よく言えば積極的、悪く言えば、厚かましいくらい(笑)。困ったら助けて、手伝って、という言葉で乗り切つてくれたので、理解してくれる方が周りにいっぱいおられるんです。柳田さんはお母さんでもあるので、子どもたちも身近に感じています」
 当日は保護者も多数参観していた。柳田さんの話を熱心に聞いていた母親は、それまで車いすの人を見かけても、お節介になるのではと声をかけをためらっていたが、意識が変わったという。
 「やっぱり声をかけてみて、コミュニケーションをとってみたいと思いました」
 健常者だった柳田さんには両者の気持ちがわかる。いわば橋渡しの役目を担っているのだ。どんな思いで自分の体験を話しているのだろうか。
 「事故の後、半年間寝たきりで、もう死にたい、死にたいと泣いてばかりでした。そ

んな私が、ひとりでも人の痕を育ててこられた。重度障がいがあつても幸せになれた。それは、いろいろな人の力を借りられたからです。だからこんなことなら手伝えるんじゃない?と子どもたちの

看護の仕事や夢を諦めて看病の日々

柳田さんが生まれたのは岐阜県大垣市。紡績会社のエンジニアだった父とパート勤めの母、2歳下の弟と4人で、市営住宅で暮らしていた。
 玄關脇の廊下を仕切つて勉強机を置こうとしたが入らず、父がノコギリで机を半分に切つて入れてくれた。
 「私にとつてはお城みたいなコーナーだったけど、家庭訪問に来た先生が『ここで勉強しているの?』とビックリしました(笑)。自分で言う



「虫垂炎だつたけど、最初はわからなくて、腹膜炎になつて3か月も入院したんです。ゴロゴロになつた父の足をバケツに浸して洗つてあげたらすごく喜んで。患者さんのそばに寄り添う看護師の仕事に魅力を感じたんですね」

名古屋の病院で18日に働いていたとき、父親が娘3人を連れてお見舞いに行くと三女は無邪気なげに『上の2人は顔が暗いでしょう?』と柳田さん

背中を押してあげることが大事かな。自分が困つたら助けて、と言つていんだよ。とも伝えています。そうしたら、障がい者だけでなく、みんなにやさしい社会になるんじゃないかと思ひます」

のもなんだけど、学級委員長をやつたり、結構しつかりした子どもだったんですよ」
 柳田さんの高校入學を機に、岐阜県との県境に近い滋賀県坂田郡山東町(現・米原市)に転居。父の美家で祖母と同居した。女は風呂に後で入るなど封建的な風習が残る地域で驚いた。
 高校は大垣市内の進学校に越境通學していた柳田さん。看護の道に進むきっかけは、父の入院だった。

「虫垂炎だつたけど、最初はわからなくて、腹膜炎になつて3か月も入院したんです。ゴロゴロになつた父の足をバケツに浸して洗つてあげたらすごく喜んで。患者さんのそばに寄り添う看護師の仕事に魅力を感じたんですね」

名古屋の病院で18日に働いていたとき、父親が娘3人を連れてお見舞いに行くと三女は無邪気なげに『上の2人は顔が暗いでしょう?』と柳田さん

卒業後は岐阜大学医学部附属看護学校に進學。3年間の寮生活を経て整形外科に配属された。骨肉腫の研究グループに入り、看護学会で発表するなどバリバリ働いた。
 脳外科に配属替えになつてまもなく、地方の病院から、水頭症の新生児が救急搬送されてきた。

「赤ちゃんは手術で助かつたんですが、お母さんが病室の屋上から飛び降りて自殺しちゃつたんです。それがすごくショックで……。障がいのある子どもを産んだ母親を、どうしてサポートできなかったんだろうと。今でも後悔しています」

28歳のとき、母親が胆石の手術をすることになり、看病のため大学病院を退職した。母の世話をしながら、「何がしたいのか」と考え、救命の最前線である岐阜県立岐阜病院長の救命救急センター(現・岐阜県総合医療センター)に就職した。いつか、海外の難民キャンプで医療支援をしたいと夢を抱いたからだ。

重度障がいを抱えてシングルマザーに

運命が一瞬で暗転したのは94年の夏。普段は病院に居続けの夫が珍しく夕方帰宅した。夫に1歳の三女をまかせて、柳田さんは洗濯物を取り込み、階に上がった。両手に洗濯物を抱えて、ら

ところが、そこもわずか半年で辞めることになる。
 柳田さんには当時、外科系の交流会で出会つた研修医の恋人がいた。たまに会うと木曾川に釣り糸を垂れて、彼の悩みを聞いた。その彼が手術中の血液感染で重症肝炎になり、死ぬ一歩手前——。

田舎に住む彼の両親に代わつて柳田さんが必死に看病。一命を取りとめたが、退院後も安撫が必要だった。
 「まだ夢への途中でしたから、救命の仕事が彼が、どちらを取るかすごく悩みました。でも、目の前で苦しむ人を放つておけない。で、アパートを借りて退院と同時に一緒に住み始めたんです。私が開業医のクリニックで昼間働いて、食べさせて。研修医でしたから貯金もゼロのうえに、稼いでもゼロの彼を(笑)」

29歳で結婚。5か月後に夫が仕事に復帰し子どもが生まれると、柳田さんはクリニックを辞めて専業主婦に。3人の娘に恵まれ、念願のマイホームを建てた。

せん階段を下りる途中、足を踏みはずして落下。腰をトーンと打ち、気を失つた——。
 そこからの記憶は途切れ途切れだ。一瞬気がつくと、かつて自分が勤務していた救命救急センターにいた。手術は



現在はヘルパーの力を借りてひとり暮らし
 13時間におよび、目覚めると身体にはたくさんのチューブがつながれていた。
 ICUから一般病棟に移ると、足につけていたモニター電極がすべてはずされた。それで柳田さんは「ああ、もう歩けないんだ」と悟つた。
 そのとき娘は7歳、4歳、1歳。三女はまだ授乳していた。柳田さんの両親に連れられて見舞いに来ると、三女はギブスで覆われて見えない母親のおっぱいを探して泣きじやくつた。
 「おへそから下のしびれがひどく、腰も激痛で痛み止めも効かなくて。半年間寝たきりで身体を起さすこともできなかったんです。もう自分のことも自分でできないのか。動けないお母さんなんて、いないほうがいいんだ。絶望と孤独の毎日で死んだほうがマシだと泣いてばかりでした」
 そんな柳田さんを見て、父親がまた世に出始めたばかりの携帯電話を手に入れ、病室に持つてきてくれた。
 「ママ今日、学校でね……」
 「ばあちゃんね……」

奪い合うようにして電話をかけてくる幼い娘たちの声を聞くと、会いたさで胸が張り裂けそうになった。
 半年後、名古屋の中部労災病院に転院。そこには自分よりひどい障がいの患者もいて、リハビリに励んでいた。
 「お子さんのために給食のナプキンを作りますか?」
 作業療法士の言葉でハツとした柳田さん。ひじで器用にミシンをかけ、娘の好きなチューリップの刺しゅうをした。
 「私はもう家には帰れないと思つていたから、前の病院ではリハビリをやる気力もなかったんです。それが、ナプキンを作っているうちに母親の気持ちを取り戻してきて。次は料理を作る気になつて、手だけで車を運転することも覚えられたんです」
 事故から1年たった95年夏に退院。再び娘たちと暮らすことができたが、戻つたのはマイホームではなく、実家の離れだった。
 医師の夫は事故当初、懸命に看病してくれた。だが、長い入院生活の間に心が離れていき、別居を経て離婚することになった。
 「夫は弱かつたのでしょうか。妻が重度障がい者になつた

いう現実、彼は向き合えなかつたのだと、私は思つています」
 いちばん支えほしい絶望の淵で離れていった夫——。

娘のために仕事を探るも30連敗

18歳で独立して以来、20年ぶりに戻つた実家での生活は肩身が狭かつた。車いすで暮らせるように父がお金を出してスロープをつけたり、離れを改装してくれたが、ヘルパーが出入りするのには嫌がつた。封建的な土地柄は変わつておらず、親戚や周囲の目を気にしたからだ。
 柳田さんは洗濯物を低い位置で干して滑車で吊り上げたり、まな板をひさの上に乗せ

そんな夫への恨み言を子どもたちには絶対言わず、前向きな生き様を見せる。離婚するとき、そう心に決めたと柳田さんは淡々と話す。



自宅のキッチンにて車いすを機につけられないと蛇口に手が届かないヘルパーには食事の支度も頼むが、味つけは自分で行う

て切つたり、マジックハンドを使って子どもに布団をかけたり。さまざまな工夫をして生活した。車いすを車に積み、買い物や保育園の送迎なども自分でこなした。
 2年後に岐阜市の自宅に戻つてからは、ヘルパーや近所の人たちの助けを借りて暮らした。三女が骨折して入院したときなど、困つたことがあると、両親が車で1時間の距離を駆けつけてくれた。
 柳田さんの事故時、4歳だった次女の理香さん(28)は、当時のことはまったく覚えていないという。ただ、物心ついたときには、3姉妹で協力して母の手助けをするようになっていたそうだ。
 「ほとんどヘルパーさんがやつてくれましたが、いないときは私たちが料理を作つたり、母のお風呂も手伝つたりしていました。でも、それが当たり前だったので、別に大変だつたとか、苦勞したとか



思ったことはないですね。
 母は障がい者とは思えないくらい元気で、家にいるときは途切れることなく、ずーっとしゃべつてました(笑)。本当にごく普通のお母さんという感じでしたよ」
 柳田さんは家では明るくふるまっていたが、悔しい思いもたくさんしている。
 岐阜市に戻つてすぐ、市役所に母子家庭の医療費減免制度について問い合わせると、こう言つて電話を切られた。「恩恵を受けることはかり考えないで、働いたら?」
 後日、直接窓口に向くと手続きはできたが、その心ない言葉は今でも忘れられない。
 別れた夫から養育費の送金はあつたものの、3人育てるには足りない。2000年に介護保険制度が始まるのに先立ち、介護支援専門員(ケアマネージャー)の試験が始まると、すぐに受けた。合格して資格は得たが、面接を30回以上受けても断られてばかり。
 ケアマネを登録していた病院に就職できたが、スタッフの嫌がらせもあり、1年あまりで退職した。

19年口ある車いすをたため、後部座席に収納

嫌味なおばさん、と思われても

その後、縁もゆかりもない八王子市で働くことになり、2002年春に上京する。

きっかけは岐阜のハローワークで受けた再就職のためのパソコン講座だった。この講座も最初、障がい者はダメだと断られたが、柳田さんは「その門をぶち破った」と笑う。

授業で作ったホームページに、柳田さんは自分の障がいや家庭状況、仕事を探していることを書いた。それを見た八王子市障害者療育センターが看護師として働かないかと連絡してきたのだ。

就職はトントン拍子に決まったが、思春期を迎えた娘たちには大反対された。

「高2になる長女は『友達と別れたくない、引越したくない』と言って。ホースで水をぶっかけられましたよ。どの子も、障がいがあるお母さんだから反抗するのはやめておこうではなく、思いっきりやってくれました(笑)」

柳田さん、長女は知り合いの児童養護施設に預かってもらうことになって、次女と三女を連れて新天地に赴いた。

療育センターでの仕事は規定以上の長時間勤務が続き、体調を崩して1年4か月で退職。介護事務所などを経て、2011年から八王子市の地域包括支援センター高尾で働き始めた。看護師として、高齢者や障がい者、介護などの相談に乗る仕事だ。

「私が相談する立場だったかわかるんですが、困って来にもすがる気持ちで相談に来る人が多いんです。だから、たとえすぐ解決できなくても来てよかったと思ってもらえるように心がけていました」

さまざまな福祉団体との連携や情報交換も行う。その過程で、車いす体験学習を行う浅川地区社会福祉協議会のメンバーとも親しくなった。

みんなで高尾山に登ったとき、柳田さんが「坂道はバッテリーの消費が早い。電動車いすの充電が山の上でもでき

障がい者の旅を作る旅は業者とタイのアユタヤへ下見旅行



たらいいな」と口にした。柳田さんは仕事上あちこち動くため、車に積める手動の車いすに電動アシスト用のバッテリーをつけている。柳田さんの要望を受けて同会長の上村さんたちが動き、ケーブルカーの駅や茶店など高尾山周辺の12か所に、車いす用の無料充電器が設置された。

どんどん外に出ていく柳田さんは、駅や公共施設などで不便を感じたことを指摘するのはもちろん、誰にでも遠慮なく物申す。

例えば、車いす対応トイレ。最近では多機能化して多目的トイレになったため、空いていないことが多い。元気な高校生などが使用しているのを見ると、「何でここに入っていたの？ ずっと待ってい

たんですよ」と声をかけると

「ちよつと嫌味なおばさんになっても、本当にこのトイレを必要とする人がいることを知ってほしいなと思って。障がい者が社会参加するのにトイレ問題は重要なんです」

2014年には、横浜で行われた第16回世界作業療法士連盟大会に登壇。当事者3人のうちの1人として、専門家を交えて、作業療法について語り合った。

柳田さんを誘ったのは福岡県に住む葉山靖明さん(53)ケアプラネッツ代表取締役。40歳のとき脳内出血の後遺症で右半身マヒになった。作業療法の効果を実感し、作業療法を中心としたデイサービスを運営しながら積極的に講演活動を行っている。

葉山さんは、全国紙に掲載された柳田さんのエッセー「車椅子からの子育て」を読み共感してすぐに連絡した。世界大会まで1年間の準備期間があったので、柳田さんの自宅にみんなで泊まり込み、合宿を数回したという。「柳田さんがうちにおいで、おいで」と言ってくれ

大好きな仕事を失い、一念発起

昨年1月、柳田さんは突然の苦難に襲われる。理不尽な理由で仕事を失ったのだ。「どれだけ努力しても、最後

て。たぶん、もともとの気持ちの木さよ、つらいことを乗り越えて得たものと両方だと思っんですが、非常に寛容で包容力があるんです。

車いすに乗ったまま押し入れから布団を出して、ひざの上に乗って、フローリングの上にパンパンと敷いてくられてね。感動しましたよ。いろいろな話をしながら、カレーを作ったり、ビールを飲んで酔っぱらったり、いい時間をいっぱい過ごさせてもらいました」

葉山さんによると、自分の障がいについて当事者が語るのは、とても勇気がいることだし、大勢の前で語れる人は少ないという。

「日本では、障がいは恥ずかしい、という意識が強いからね。柳田さんみたいな障がいの人って、実は結構いるけど、家に閉じこもっているんです。僕たちが恥ずかしさを乗り越えて、自分のいちばん嫌な体験を話すのは、少しでも医療のため、福祉のため、今も閉じこもっている障がい者のためになれば、そう思っているからです。柳田さんも同じだと思いますよ」

はこれか。障がいが原因で好きな仕事を奪われるんだと。ケガをしたとき以上にショックでしたね……」



2015年初めてケーブルカーを利用して電動車いすで高尾山へ。駅員の手慣れたサポートに感激

勤務する地域包括支援センター高尾が移転することになったが、移転先には柳田さん用の駐車場がなかった。いつも車いすを車に積んで地域を駆け回っており、車がなければ仕事ができない。労働基準監督署や市議会にも訴えたが、覆らなかつた。

それからわずか3か月後の昨年4月、柳田さんは再び動き出した。

「一般社団法人S3i0 Agoin(スマイルアゲイン)」を設立し講演活動、企業のバリアフリーコンサルタントなどを開始。就活を控えた大学生やリタイアしたシニアなどに向けて、車いすの介助を教えたり資格を取れる講座を開く準備を進めている。

法人立ち上げと同時に、自らバリアフリーナースとも名乗り始めた。

提案したのはブランドデザイナーの八幡清信さん(43)だ。名づけた意図をこう説明してくれた。



2012年、三女の20歳記念で米国に旅行したときの写真。口ゴロは八幡さんがデザイン

「健常者と障がい者の間にはある意味バリアがあります。柳田さんはそのバリアをなくして、両者をつないでいきたいという思いを強く持たれています。また、看護・介護のプロとして、社会のバリアフリーを推進していく提案もいろいろされてきました。ものすごく熱意があつて、やりたいことにあふれている

どん底を救ってくれた好青年と……

それにしても、どうしてそんな短期間で立ち直ることができたのか。

不思議に思つて柳田さんに聞くと、その裏に意外な人物の存在があつた。ガーナに住むナイジェリア人のアーネスト・オテさん(31)。

2年前に友人の友人として知り合い、無料のビデオチャットを使って英語でやりとりを続け、親しくなつた。オテさんは、やさしく明るい好青年だという。

「私がどん底に落ちたとき、彼に救ってもらいました。彼は早くにお父さんを亡くして一生懸命働いてお母さんを支えてきました。友達もたくさんいて、負いけど、みんなで助け合いながら暮らしています。先のことを心配するより、いま生きていることが大事なんだと教えてくれました。彼と話しているうちに、私にもまだできることがある

方なので、誰とでも、どこまでも心を開いて、心のバリアフリーを実現できる。そういう意味を込めてネーミングしました」

柳田さんの仕事の幅はむしろ法人を立ち上げてからのほうが広がつたように思える。ただ、今は退職金で経費をまかなつているので、経済的に早く軌道に乗せたいという。

んじゃないかと、前を向くとどができたんです」



今年2月ナイジェリアでの結婚式。新郎の妹が介助してくれた

心をきかす

昨年11月、柳田さんはひとりで飛行機に乗り、オテさんに会いにアフリカまで行った。そして今年2月に再訪し、現地で結婚式を挙げた。今は夫のビザが下りるのを待っているところだ。

「年の差はあるし、私は障がい者だし、『結婚詐欺じゃないの?』とか、いろいろ言われましたよ。私も疑つて、キツイ言葉を言つたりしたけど、真剣なんだとわかりました。

長女と三女はまだ理解してませんが、次女だけは『もうお母さん自由だから』と言ってくれましたよ」

離婚して以来、柳田さんはずっとひとりで、頑張りすぎるほど頭張つてきた。ものすごく強く見えるが、もしかして内心は寂しかったのではないかと。そう聞くと、柳田さん

昨年11月、ガーナの美しい村に住むオテさんの自宅を訪ねた



はしばらく考えて、こう答えた。

「これまで寂しさを感じる間もなく必死で生きてきたけど、娘たちを育て上げて、ちよつと余裕ができて、人恋しくなつたのかな……。まあ、誰も信じてくれなくても、私がハッピーで、それがまた働く元氣になればいいじゃない」

オテさんが日本に来てスタッフに加わつたら、人種の壁も越え、さらにバリアフリーになると笑う。

身体は不自由だが、心は誰よりも自由だ――。

取材・文/秋原組代
撮影/渡邊智裕

はきわらきぬよ、大学卒業後、週刊誌の記者を経て、フリーのライターになる。90年に東京女子大学1年次のボランティア活動で卒業。05年に帰国後は社会問題、教育、児童などをテーマに、週刊誌や月刊誌に寄稿。著書に『死か生きるか』がある。